

木幡 文徳・新図書館長に聞く



法学部に入学以来、専ら大50年過ごしてきまし。専ら図書館のユーザーとして、判例集や雑誌など限られた範囲を利用する程度。学生時代を含め、図書館は調べ物をするとか何か目的がないと入れない雰囲気があり、蔵書を管理する所と感じたこともあり。前任の大庭健文学部教授からの引き継ぎで、今はずいぶん利用者本位になっていると認識しました。専門的な知識を有するライブラリアンが窓口で相談に乗ってくれ、新入生には図書館の効果的な利用法や設備を学ぶ図書ツアーが催されている。近年、特に進歩したと思います。

30年ほど前の米国留学では、大学における図書館の存在感が印象的でした。相当な知識人でも本は買わず、図書館で読むか借りる。勉強も図書館です。学生や教員と図書館との密着度が日本とは違っていました。

図書館は利用されてなんぼのもの。学生にもっと利用してもらうには図

利用しやすさ求め 形態にこだわらず

い距離感をつくるのが「ラーニング・コモンズ」で、4月に神田キャンパス5号館の1〜3階に誕生しました。

パンコンや思い思いに使える椅子、テーブルがあり、常駐のライブラリ

アンもいます。本学図書館神田分館のある3号館と連結していませんが、開放的な造りで、図書館だと構えずに自由に出入りできる意義は大きいでしょう。

学生が本を読まなくなったといわれますが、情報を受容しなくなったわけではありません。体系的な情報といえは僕らの時代は紙を主体にした書物でしたが、今後はインターネットを通じて受け取った情報の重みが増していく。脳内での受容や定着の仕方が書物の場合とどう違うのか僕には分かりませんが、書物という形態にこだわらない図書館も「あり」だと思います。

情報の集積に自由に接近して、教室での講義とクロスさせる。意見を交換し学問や交流を深める。ラーニング・コモンズがそうした利用価値を發揮するように、学生や教員から提案や要望を受け付けています。使い勝手が良いようにみんな育てていきたい。議論が巻き起こることを期待しています。



大入さん(右)の指導で「四ツ目綴じ」に挑戦

専修大学には図書館が生田、神田の両キャンパスに計4館あり、蔵書は合わせて約175万冊。貴重本を含めあらゆる分野の図書や資料、雑誌がそろそろ。読書や資料調べだけではなく息抜きにもなる図書館の利用の仕方は人さまざま。4月に図書館長に就任した木幡文徳法学部教授(任期は2年間)に、本との付き合い方、これからの図書館のあり方について伺った。また、4月に生田で開催された和装本を製作するワークショップの様相を紹介する。

生田図書館でワークショップ

学生・地域の方々 和装本作りに挑戦

留学生を含め14人 矢野学長も参加

和装本を製作するワークショップが4月18日、生田キャンパスの図書館で開かれ、学生や地域の方々14人が「四ツ目綴じ」に挑戦した。日本古代史・日本文化史が専門の矢野建一学長と同研究室の大学院生ほか4人も参加した。

ワークショップは、文字の歴史や変遷を、本学所蔵の書物などを通して探る企画展「文字の歴史展―和(やまと)―」(4月1日〜29日)に関連するイベント。「実際に手にすることで和本の良さに触れてほしい」という狙いで、図書館として初の試みとなった。

「四ツ目綴じ」は和本の代表的綴じ方で、和紙に4つの穴をあけてとじ糸を通す。講師は、和装本など文化財の装幀(製本)や修復を手がける経師で、(株)大入(京都市)の大入祥平さん。

経師についての説明とともに巻物や折本などを示しながら書物の歴史を解説。「和装本作りを通して、きちんと手で作られたものの良さを知り、同時に日本の伝統文化を身近に感じてほしい」と語った。

学生、院生とともにチャレンジした矢野学長は、「和装綴じを40数年ぶりに体験した」と笑顔で語った。参加者には講師の説明が分かりやすく楽しかった。「和本の仕組みがよく分かった」と好評だった。

ベトナムの留学生グエン・トアン・コイさん(院文修2)は「糸を通すところが難しくてなかなかできなかったが、手作りは面白い。出来上がった和装本を自分の手で確かめられて感激した」と話していた。

ワークショップは同25日にも開かれたが、この日もほぼ満員だった。



▲ 矢野学長も院生、学生に交じって参加
▲ 完成した和装本を手にするグエンさん



▲ 店主の中島さん。左後方にはカヌーを転用した棚が立つ

専大とともに 神田神保町探索

デザイン、素材、縫製がしっかりしていて状態の良い古着を扱う。「良いものって何ですかとたまに聞かれます。自分が着たあとに誰かが欲しいと思えるもの、と答えますね」

柔らかな物腰の店主・中島達矢さんは、バックパッカーとして50カ国以上を旅してきた。さまざまな人と出会い、見聞きした経験と行動力は、天井を抜き、壁にしっかりと塗り、什器を手作りした店づくりに結実している。山小屋を意識したという店内はレトロな小物や雑貨が置かれ、くつろげる雰囲気。客は20歳前後の学生から30代前半の会社員が多い。

「店の人と話しながら買う物するのは楽しいですね。何気ない会話からいろいろな情報がもらえるかもしれない。でも若い子はそういうやり取りが苦手みたいですね。対応していて「ちょっと話し方を変えれば印象が大きく違ってくるのに」ともどかしく感じることもあると笑う。

神保町には異色といえる古着店だが、戸口には店名がペイントされているだけなので、商品を手に取って「古着?」と気づく客も。ワインテック(高価な希少品)にはこだわらず「品ぞろえのモットーは」普段着としてストレスなく着られる服。年5回

古着店「WADLL(ワドル)」

ストレスなく着られる服が並ぶ



▲ さりげない店構え

アメリカの古着店やフリーマーケットなどを回りJ・クルーやラルフローレンをはじめとするカジュアル衣料を仕入れている。価格は半袖Tシャツが1980円(以下すべて税別)、コットンシャツが2980円、デニムやコットンのパンツが6090円など。サイズはXS〜Mで、色もデザインも中島さん自身が着たいと思うものだけを置く。すべて1点ものだ。

取材をした4月下旬、最も高価だったのは1940年代のリーバイス「ファースト」のデニムジャケット4万9800円。前身頃にひだを施したしゃれたデザインもさることながら、70年前の物とは思えない襟のきれいに驚かされた。「古着屋独特のにおいが嫌いなので、洗濯には手間をかけています。色や風合いと清潔感とのバランスをとるのは難しいですね」

よちよち歩き(waddie)をもじって名付けた店も5年目。初めて店を持つあたり若者に人気の原宿や吉祥寺、祐天寺なども検討したが、古本やスポーツ用品など目当ての品を求めて人が集まる神保町の懐の深さ・アクセスの良さが決め手になった。

「神保町は表通りも面白いけど、路地や雑居ビルの2階にも思わぬ発見があります。卒業してもきっと戻って来なくなる街だから、どこか1軒なじみの店をつくってほしいですね」

※「WADLL」〓東京都千代田区神田神保町2-28 加瀬ビル1階 ☎03・6312・9717 営業時間:13時〜21時 無休 5月下旬から仕入れのため2週間ほど休業する。